The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	横合地区の活性化 ： 地域住民の不安と希望の観点から
Author(s)	周, 萌; 萩之内, 大; 李, 睦
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 253-266
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

報告

横合地区の活性化―地域住民の不安と希望の観点から

周 萌
大阪大学法学研究科
萩之内 大
大阪大学人間科学研究科
李 睦
大阪大学人間科学研究科

1. はじめに

横合地区は、岩手県北部の野田村に位置し、種綿（たねわた）、間明（まみょう）、大葛（おくぞう）、日形井（ひかたい）の四つの集落から成り立っている。昔は南部有数のたたら鉄産業地帯だった。山間部に位置し、自然豊かな環境である反面、過疎化や高齢化の問題が深刻である。特に若者の流出が進み、人口減少による社会的、経済的な影響が地域に大きく及んでいる。

今回のフィールドワークでは、「横合地区の活性化」をテーマに、住民へのインタビューを通じて地域の課題を探った。主に農業、食文化、イベントの継続や、地域における高齢者の生活状況に焦点を当てた。調査に協力いただいた内野澤進さんをはじめ、他の住民の方々にも地域の歴史や現状、将来への希望を詳しく伺った。これにより、横合地区の抱える現実的な問題と、そこから見出せる可能性をより具体的に理解することができた。

u369463h@ecs.osaka-u.ac.jp（周）

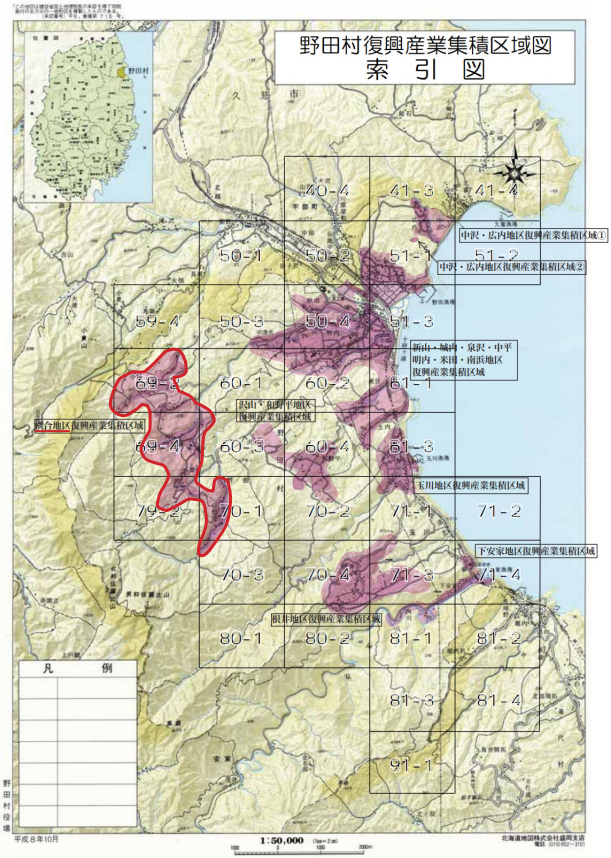


図 1 2021「野田村復興産業集積区域図 索引図」[1]

2.　横合地区の概要

横合地区は野田村の西部に位置し、かつては豊かな自然と農業を基盤としたコミュニティが形成されていた。復興庁の資料で、野田村横合地区の復興マップに関する説明を発見し、そこで横合地区の全体マップを確認した。横合地区は山間部に位置しており、交通に多くの不便があることが確認できる。特に厳

しい冬の積雪と、近年増加している野生動物（クマやイノシシなど）による農作物への被害が大きな課題となっている。また、現在は少子高齢化とともに農業従事者の減少、そして伝統的な文化と行事の衰退が進んでいる。

地元では豆腐やそばなどの伝統的な食文化が長い歴史を持ち、地域のアイデンティティの一部となっている。しかし、都市部から距離があるため、住民の生活圏が限られており、若年層が仕事や教育のために都市部へと移住する傾向が強まっている。後継者不足や若者の都市部への移住の影響で、これらの文化が継承されず失われつつある現状もある。また、地区内ではイベントや祭りを通じて住民同士のつながりを大切にしてきたが、現在では高齢者の方々が多く、祭りへの参加が困難になりつつある。

中村隼斗さんにインタビューした際、令和6年7月末時点の世帯数を聞いた。それによると、野田村全体が1675世帯に対して、大葛は17世帯、種綿は23世帯、間明は15世帯、日形井は16世帯となっている。地区には主に高齢者が残り、高齢化と過疎化が進んでいる状態である。こうした人口構成により、地域での伝統文化の継承やコミュニティの維持がますます難しくなっている。

3. 調査の概要

3.1 調査方法

今回のフィールドワークでは、以下の方法で調査を行った。

1）住民へのインタビュー

横合地区の住民8名を対象に、半構造化インタビューを実施した。インタビューでは地域の生活状況、課題、地域に対する将来の期待などを中心に聞き取り、特に高齢化や農業の衰退に対する住民の声を集めた。各集落から多様な背景を持つ住民にご協力いただき、現地の生活と密接に関連する問題を明らかにした。

2）現地観察

横合地区内を訪問し、農地や住宅の現状、野生動物による被害の実態、空き家の増加状況などを観察した。また、各集落で行われる伝統行事やイベントについても直接現地で確認し、地域文化の継承状況を把握した。

3）文献調査

横合地区の歴史や過去の取り組みについての情報を集めるため、地域の公的資料やコミュニティ・ラーニングの過去の報告書などを参照し、農業や文化の変遷についての知識を深めた。そして横合地区の現状に合わせたアイデアを模索した。

3.1.1 スケジュール

今回の9日間にわたるフィールドワークの中で、特に3日間、質の高いインタビュー活動を実施した。その後、村民の方々から伺った声や具体的な状況を基に、野田村内の各地を深く見学する機会を得た。インタビュー対象者については、横合地区を構成する種綿、間明、大葛、日形井の4つの集落に住まれている方々からそれぞれお話を聞けるように選定した。特に、日形井の内野澤さんには多大なご協力をいただき、4地区すべての住民の方をご紹介していただいた。横合地区での調査のうち、3日間にわたるインタビューのスケジュールは表1に示す通りである。

表1　フィールドワーク調査のスケジュール

日付	時間	場所	活動内容
2024年8月19日	午前	内野澤さん自宅	内野澤進さん、てるさんご夫妻にインタビュー
	午後	生涯学習センター（図書館）	間明のAさんにインタビュー
2024年8月20日	午前	中村純子さん自宅	中村純子さんと中村キミさんにインタビュー
	午後	野田村役場	中村隼斗さんにインタビュー 図書館で横合地区の文献調査
		図書館	
2024年8月21日	午前	日形井苫屋	種綿民子さんと下川とみこさんにインタビュー
	午後	横合地区	種綿、間明、大葛、日形井 現地観察 アジア民族造形館訪問 4つの集落の公民館を観察

3.1.2 インタビュー対象者情報

インタビュー対象者については、横合地区内の各地域から異なる年代の方々をできる限り選定し、幅広い視点から情報を収集した。具体的には、若年層の生活、仕事、子育てに関する状況や、高齢層の方々の日々の楽しみや生活に関するお話を伺った。このように、多様な年代に焦点を当てることで、横合地区における世代ごとの生活環境や課題についてより深い理解を得ることができた。

3.2 調査内容

表 2　インタビュー対象者リスト

日形井	内野澤進さん	日形井生まれ育ち、野田村の議員、70 代
	内野澤てるさん	種綿生まれ、日形井に嫁ぐ、内野澤進さんの奥様
間明	A さん	間明に移住した若い世代
大葛	中村純子さん	日形井生まれ、大葛に移住してきた。80 代
	中村キミさん	大葛生まれ育ち、80 代
	中村隼斗さん	大葛生まれ育ち、役場職員、20 代
種綿	種綿民子さん	大葛出身で種綿に移住した。70 代
	下川とみこさん	間明生まれ、種綿に移住した。60 代

「横合地区の活性化」という課題を取り組むためには、誰のための活性化なのかを考えなくてはならない。ゆえに私たちのグループは住民たちのニーズについてインタビューを行った。

3.2.1 自然と飲食について

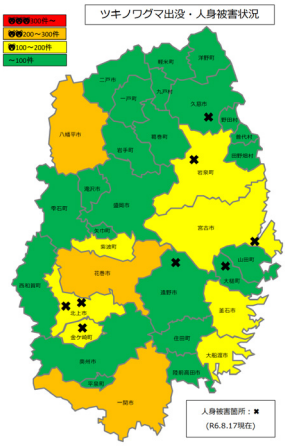
横合地区では、稗、麦、インゲン豆や夕顔、荏胡麻、いなきびなどの作物を育てている。クマによる被害が続いて、育てるのが難しい現状である。現地では、多くの農地が耕作の継続を希望しているものの、高齢化により後継者が不在の農地が増えているため、土地を継ぐ人がいない、5年から10年後には農地の有効活用に向けた担い手の確保が課題となっている。

横合地区には野田村横合鳥獣保護区がある。役場にはクマ対策として鳥獣対策班があり、罠を仕掛けたり、猟師に頼むことがある。電気柵を設置しているところもあるが、横合地区は役場から遠いため、役場から来てもらいづらく、

実際には、効果的な対策が取られているとは言い切れない。改善していくことが課題となっている。

農業の発展による横合地区特有の食文化もある。この地区には「ヤジバダ豆腐店」があり、地域で親しまれる豆腐や田楽を手作りしていた。昔からイベントで手作りのそば、豆腐田楽などが提供された。豆腐屋や炭釜の閉鎖など、伝統的な製造方法が失われつつある。下川とみさんは「以前はここの豆腐は東京でも販売していた」とおっしゃっていた。現在はクマやイノシシの被害や、人工不足によって大豆の栽培が減少しており、豆腐の品質が維持できない状況である。

そのため、これらの問題を解決すれば、地域の活性化も出来ると思う。



（上）図２ 日形井の冬景色[2]
（右）図３ 野獣出没状況[3]

3.2.2 伝統文化とイベントについて

横合の山に住まわれている住民の中には高齢者が多い。伝統を重視する住民たちにとって年中行事は水のような日常に欠かせないものである。日形井の内野澤ご夫妻はインタビューの際、「日形井縁日」(アジア広場で開催される日形井独自のイベント)について度々言及された。下川さんは、「孫を日形井縁日につれて行くつもり」と仰っていた。もともとコロナ禍で一旦中止した横合地区のイベントは、今年新しく修繕された橋をきっかけに久々に再開された。イベ

ントの際、たまたま横合に来ていた観光客も混ざることで、普段より賑やかになるというお話も聞いた。住民たちがイベントを大切にする理由は、盛り上がるだけではなく、イベントを通じて住民たちの孤独感を和らげ、お互いの絆を再確認する機会でもあるからではないだろうか。

しかしながら、横合地区の住民たちに参加しようにもできない方がいる。ほかの地区と違い、横合地区は山奥に位置しており、運転免許がないと非常に不便である。「のんちゃんバス」という村が運営する交通機関があるものの、住民たちのニーズを十分に満たせるとは言えない。なお、「年を取ったから行きたくない」という理由も高齢者たちがイベントに参加しなくなる一因になっている。

今年の「野田まつり」に参加しないことを私たちに表明した中村純子さんは、参加しないにもかかわらず、いまだに真剣に村ならではの踊りや太鼓の継承者がいないことを一番心配していた。少子高齢化が進む前の横合地区の賑わいについて語りながら、伝統文化を大切にしているということも語ってくれた。

祭りなどイベントに力を入れて、高齢者を含めて誰でも気軽に参加できるように、イベントを「活性化」するのも、横合地区の活性化に役立つだろう。

（上）図４　アジア民族造形館で展覧しているなもみの様子
（右）図５　2024年日形井縁日ポスター[4]

3.2.3 高齢者と若者の繋がりについて

今回フィールドワークを行うにあたって、「横合地区の活性化」について考えたが、ここでは活性化を、住民の活力、幸福度のアップと位置づけ述べていきたいと思う。なぜなら地域活性化を考える際の出発点として考えるべきだという考えと、ただ経済的な発展を目指すだけでなく、そこで暮らす人々の生活の質や日常の満足度が向上することが重要だと考えられるからである。住民がより幸福だと感じる生活を送れるような地域づくりは、持続可能で地域特有の強みを生かした発展に繋がるだろう。横合地区は少子高齢化、人口減少が深刻な課題であると言える。インタビューの際にも、「ここら辺は高齢者ばかりで」という声や、「子ども、若者が全然いない」「寂しい」という声も多く聞かれた。日形井に住まわれている内野澤さんご夫妻にインタビューを行った際には、大阪大学災害ボランティアサークル「すずらん」の方々との思い出をとても楽しそうにお話しされていたのが印象的で、「この地域は高齢者ばかりだから学生と関わることで若さをもらえる」という風に仰っていた。

また、日形井にはアジア民族造形館や苫屋があることから、内野澤てるさんは、観光をしに来た人と散歩中に話すことも楽しみの一つだと仰っていた。大葛に住まれている中村純子さん、中村キミさんにインタビューした際には、年を重ねるにつれて体力的に大変になり、祭りや敬老会があってもなかなか行く気になれないというお話を聞かせていただいた。しかし、大葛の公民館で5人程度で行われている「いきいきサロン」という集まりには参加をされており、そこでは仲の良いメンバーがいるというお話も聞かせていただいた。「いきいきサロン」では靴下の口ゴム部を使って座布団のようなものを作っており、私たち三人も一人ひとつずついただいた。

中村キミさんのお孫さんである、役場の中村隼斗さんにもインタビューをした。中村純子さん、キミさんのインタビューを参考に、もっと近くで祭りが行われれば参加するのか疑問に思いインタビューを進めたところ、大葛で祭りなどのイベントが行われても高齢者が自ら参加するのはなかなかハードルが高いこと、誰かに誘われたら参加する可能性があり、仲間内（いきいきサロンのメンバーなど）で参加しようという雰囲気になればほぼ100％参加するだろうというお話を聞くことができた。

また、間明に移住したAさんから聞いたお話では、横合地区には昔あった託児所や小学校が現在は無いため、横合地区から地区の外へ通っているそうだ。

子育ての面では、住民同士の繋がりが強く、皆顔見知りであることから、安心できるという話も伺うことができた。

今回のフィールドワークを通じて、住民の方、特に高齢の方は、横合地区の生活に大きな変化を求めているわけではないことが分かった。そして、確かに困っていることはいくつかあるが、高齢者ばかりだからという理由で断念している部分も見受けられた。現状として共通しているのは、横合地区には高齢者がほとんどであるため若者と関われる機会を望んでいるということである。しかし、年齢のせいもありイベントなどが行われても自ら参加しようとはなかなか思えない可能性があることなどが挙げられる。また、横合地区の特徴として、住民が少なく、地区内で親戚関係にある人が多数住んでおられて、ほとんどみなさん顔見知りで住民同士の強いつながりがあることもわかった。

図６　内野澤ご夫妻との写真

図７　中村純子さんと中村キミさんとの写真

図８　種綿民子さんと下川とみこさんとの写真

図９　中村隼斗さんとの写真

4. 提案

4.1 農業・野生動物対策

野田村における農業活性化に向けて、以下の提案が考えられる。まず、農業をリタイヤする方や経営を転換する方については、可能な限り農地を「農地中間管理機構」に貸し出すことになる。地域の中心的な農業経営体が担い手となるほか、新規就農者の受け入れを促進する取り組みが求められている。農地の有効活用と新たな担い手の確保を図り、耕作放棄地の発生を防ぐことができる。そして農業の再生には、野生動物被害の対策が不可欠である。特に横合地区では、高齢者世帯が多いため、個々の家庭での対策が難しい現状がある。そのため、監視カメラの設置や捕獲報告システムの改善に加えて、電気柵の設置を手伝うボランティア制度の導入など、住民全体で協力できる仕組みが必要である。例えば、地域の若者や外部のボランティアを募り、地域内の高齢者世帯に対する支援を強化することで、被害を最小限に抑えることが期待される。

また、地域特産である山ぶどう、豆腐などの生産振興にも力を入れ、加工品の生産・販売に取り組むことで、農業所得の向上と地域振興を目指す。こうした取り組みを通じて、地域の集落の活性化にもつなげることが期待される。地域特産品の栽培や販売を通じて農業の魅力を若者に伝え、農業後継者を育てるための支援策も必要である。地元の食文化体験イベントや道の駅での販売促進を行うことで、農業に関心を持つ若者を呼び込み、地域の農業を支える人材育成につなげることが期待される。さらに、地元の農業に関わるワークショップを定期的に開催し、技術指導を行うことで、次世代の農業担い手を育成する取り組みを検討することも良いと思う。

4.2 イベント参加の促進対策

横合地区の住民のイベントをサポートするため、まずは交通手段を整えるべきである。イベントや祭りの際に特別な交通手段を配置することを提案したい。例を挙げると、お祭りバスを配置し、車のない住民でも楽に参加できるようにする。ほかに、年配の方は様々な原因で不安を抱えている。例えば体力不足でイベント参加すれば疲れ切ることなど、イベントや祭りが好きなのに参加できなくなる。対策として、ボランティアを募集し年配の方を見守ることには効果が期待できる。また、イベントの会場で車いすなどサポートを提供することな

ど、年配の方にやさしい措置を講じることで参加を促すことができると考える。そうすると横合地区の住民たち、とくに年配の方も村の祭りに参加できるようになり、寂しくなくなるのだろう。

4.3　強いつながりを利用した好循環

高齢者と子ども、若者の交流する場が求められていることが分かった。そこで、役場の方やイベントを主催する方の意識として、横合地区の強いつながりを利用して参加を促すのが良いと考える。まずは子どもから大人まで楽しめるようなイベントを主催する。横合地区には子ども、若者が少ないことから、野田村全体から人が来るようなイベントにする必要がある。そして各地域、各コミュニティのキーパーソンとなる人物を中心に宣伝し参加を促す。住民の方々がイベントに参加し、子ども、若者と接することで活力を得る。また参加したいと思うことで、次回以降参加の意欲が沸く可能性を高める。回を重ねるごとに参加したいと思う人が増えると、キーパーソンに頼らなくてもイベントに参加してくれる方が増えるという好循環が生まれると考える。

また、間明に移住されたAさんのお話から、横合地区には子育てを行う地域的基盤は存在すると言える。そこで、若者の移住を促進するには、託児所などの子育てに関する施設や、育児支援の更なる充実を図ることも視野に入れることが重要だと考える。そして横合地区に若者の移住者が増えると上述した好循環に加えて、若者と高齢者の交流の機会を増やすことができ、横合地区の活性化に繋がると考える。

5.　おわりに

ここまでのテーマに分けて述べてきたが、害獣対策は喫緊の課題であると言える。害獣による被害のせいで、これまで小さな楽しみとして行っていた農業ができなくなり、困っているというお話を多数聞いた。また、昔の話を聞く人がいなくて寂しいというお話、そして年代が離れていると言葉が通じないことがあるというお話も聞き、文化伝承の必要性も感じた。そして先述した通り、若者と住民の方々が関わるような機会の需要はある。若者と高齢者との関わりの場として祭りなどのイベントを挙げたが、その際に文化の伝承として踊りや

食を伝えることできると思う。インタビューの中で、高齢者は踊りや食についての知識は豊富だが、それらの伝え方が分からないのではないかというお話も聞かせていただいた。そこで、役場の方々が若者と高齢者の間にたち、その伝承のサポートをするのも一つの手であると考える。今回、横合地区の活性化についてフィールドワークを行ったが、生活の質を向上させるというような視点の活性化ではなく、横合地区に住む住民の方々の心の幸福度を上げるような視点を重要視するのが良いと考える。

謝辞

今回の調査を実施する前に、野田村役場の方に都市の活性化対策ではなく、小さな所に、野田村にふさわしい活性化対策が欲しいと伝えられました。なんだろうかと思いながら、調査を実施しました。実際に調査を展開したら、だんだんと役場の方の話を理解できるようになりました。

野田村という村は東日本大震災で被災しただけではなく、日本全国の少子高齢化の影響が深刻化しているなか人口減少の問題に悩まれています。さらに、横合地区はより特別な存在です。調査を通じて私たちは横合地区は大震災の影響が少なかったが、人口減少及び少子高齢化で限界集落になったことが分かりました。しかしながら、横合地区の住民たちにとって単なる住民を増やして地域を「活性化」することは望ましくありません。「活性化」というより、自然または移住者のいずれにしても、理解しようとする心を踏まえて互いに相手の習慣や文化を尊重しながら共に生きる、すなわち共生におけるハーモニーの状態こそ、住民の望みです。したがって、私たちの調査方針は最初の「何か新しいものをもたらして地域を活性化する」から「どのように横合地区ならではの活性化を提案するか」へと転換しました。また、横合地区の住民たちとの交流のうちに（というよりむしろ一方的お世話になった）、人間と人間とのやり取りの実践の中でよりいい道を模索することこそ醍醐味でしょう。

今回の調査では野田村の方々に大変お世話になりました。まずは貫牛さんのお誘いのおかげで野田村での調査ができました。日形井の内野澤進さんとてるさんは横合のことを紹介してくれるのだけでなく、栽培している夕顔と手料理の炊き込みご飯でもてなしてくださいました。調査で疲れ切った私たちは美味しく頂き元気が出てきました！　中村純子さんと中村キミさんに座り心地のいい手編み座布団を頂戴いたしました。下川さんと種綿さんは私たちが滞在して

いるところまでに来てくださって大変助かりました。また、中村隼斗さんとAさんはお仕事で忙しいところ、時間を合わせてインタビューを受けていただきまして誠に感謝いたします。もちろん、今回の調査は野田村役場の方々からのサポート、先生たちの支援や指導がないとできませんでした。ありがとうございました。

自分の調査で地域を活性化することには遥かに足りていないと承知しておりますが、毎年定例の調査を通じて少しでも役に立てればと思っております。僅か一週間にすぎない調査で私たちは横合との絆、野田村との絆を結び付けまして「準野田村民」になりました。また機会がありましたらここに戻って話し合いたいと思います。

注

1　復興庁、2021「野田村復興産業集積区域図 索引図」https://www.reconstruction.go.jp/topics/nodamurasakuin.pdf（2024/10/30 アクセス）

2　野田村観光協会、2011 野田村フォトギャラリー『日形井の冬景色』https://www.noda-kanko.com/photo/2011-01-17-11-37.html（2024/10/30 アクセス）

3　岩手県ホームページ、2024「ツキノワグマによる人身被害状況・出没状況」https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1056087.html（2024/10/30 アクセス）

4　野田村観光協会、2024「「自然と遊ぼう！日形井えん日」イベントポスター 」https://www.noda-kanko.com/news/2024-05-19-11-00.html（2024/10/30 アクセス）

参照文献

渥美公秀 , 貫牛利一

2021 『東日本大震災と災害ボランティア：岩手県野田村、復興への道』大阪：大阪大学出版会。

岩手県ホームページ

2010 「草の根地域訪問『こんにちは知事です』(平成22年11月2日 アジアの広場まつり）懇談記録」https://www.pref.iwate.jp/kensei/kouchoukouhou/kondan/kusanone/1000985/1001005.html（2024/10/30 アクセス）

佐々木勝三

1989 『野田村の歴史ものがたり：村制施行百周年記念』野田村：岩手県九戸郡野田村。

田村栄一郎
1987 『みちのくの砂鉄いまいずこ』久慈：久慈砂鉄の会。

野田村教育委員会
1979 『野田民俗誌』野田村：野田村教育委員会。

細井計監修 ; 田村栄一郎編
1992 『野田村誌 : 通史・史料』 野田村：岩手県九戸郡野田村。